

## 5-2 「木曽川に囲まれた町、川島」 川島小学校（岐阜県）

## 実践の概要 ～第4学年（平成14年度）と第6学年（平成13年度）の実践比較～

テーマ	木曽川
対象とした社会資本	木曽川、河川環境楽園
学習のねらい（つけたい力）	<p>自分たちの町を囲んでいる木曽川や川に囲まれている町ならではの特徴に関心を持ち、町探検をする中で自ら見つけた疑問を解決するために、木曽川の調査、河川環境楽園の実験河川での研究、自然研究共生センターを見学、町民会館での調べ学習及び取材、地域での取材などを通して、町を囲む木曽川や木曽川に囲まれた川島町への理解を深めたり、愛着を持ったりすることで、自分ならではの町自慢をできるようにする。</p> <p>また、木曽川や川島町について学んだことを、まとめ方や発表形式を工夫して外国人講師に伝えることができる。</p>
展開の概要 ・右図に示す流れで学習の展開を行った	<p>つかむ</p> <p>川島自慢(地域理解)ができるようにしよう</p> <p>ラフマーン先生に アーロン先生に</p> <p>国際交流ができるようにしよう</p> <p>第1次「木曽川と川島のかかわり」</p> <p>「気づく」 → 「追求する」 → 「深める」 → 「まとめる」 → ラフマーン先生や仲間へ伝えよう (詳細は本文参照)</p> <p>第2次「現在の木曽川」</p> <p>「つなぐ」 → 「追求する」 → 「深める」 → 「まとめる」 → ラフマーン先生や仲間へ伝えよう (詳細は本文参照)</p> <p>第3次「河川環境楽園」</p> <p>第4次「川島の伝統・文化、産業」</p>
実践経過	<ul style="list-style-type: none"> <li>・川島町を紹介することについて、最初は「そんなこと簡単」と思っていた子どもいろいろ調べてみると奥が深く、自分の知らないことがいっぱいあることに気づく。</li> <li>・調べてゆくうちに、子どもたちの興味はどんどんふくらんでいき、本で調べるだけでは物足りなくなり、昔を知っている人の生の声を聞きたいという地域の人との関わりが生まれてきた。</li> <li>・この学習を機会に、自分たちでビデオカメラなどをもって、自然共生センターまで行って、もう一度取材をしたり、確かめたりする自主的な活動も生まれた。</li> <li>・自分が自信をもって紹介できる川島町の場所が増えた子が多かったことが、地域理解を深めるといふねらいに迫れたのではないかなと感じた。</li> </ul>
主な支援内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「河川環境楽園」での学習に対する支援</li> <li>・ゲストティーチャー</li> <li>・資料等の提供 等</li> </ul>

## 実践報告書

## 木曽川に囲まれた町、川島

～ 「木曽川」「河川環境楽園」から学ぶ総合的な学習の時間 ～

岐阜県羽島郡川島町立川島小学校 山本 勇二

## 1. はじめに

川島町[かわしまちょう]は岐阜県南部に位置し、南は木曽川南派川[なんばせん]を隔てて愛知県一宮市、江南市、北は木曽川北派川[ほくはせん]を隔てて各務原市、羽島郡笠松町と接しています。

町全体が木曽川に囲まれた川中島となっているのが大きな特徴です。また、都市近郊の割には自然に恵まれていることもあり、東海地方でも有数の野鳥の楽園として知られています。昭和61年には世界的珍鳥「コウライアイサ」が町内の河川敷で確認されました。

古くから、織物[おりもの]業、撚糸[ねんし]業(糸によりをかける仕事)などの繊維産業が発達し、地場産業の基盤をなしています。また、昭和38年に企業誘致した大手製薬会社は安定した業績を維持し、本町の産業基盤をつくっています。

平成11年7月には、町内に河川環境楽園が一部開園しました。年間300万人近くが訪れる交流拠点として、大変にぎわっています。

本校は、木曽川に囲まれた川島町のちょうど中央に位置する学校である。橋ができるまでは渡し船が島から出る交通手段だった。また、堤

防もしっかりしておらず、洪水にも悩まされたため町を4つに分けるような形で分校があり、低学年のうちはその分校に通い、高学年になると現在の位置の川島小学校に通うという時代が昭和37年まで続いた。

## 2. 学校の実態

児童数 671 名、教職員数 33 名、学級数 20

学校教育目標は、「心豊かなたくましい子」の育成をめざし、「おもいやりの心」「かんがえる頭」「じょうぶな体」を3本柱として、日々の教育活動に勤しんでいる。

本校の総合的な学習の時間は、1・2年生の生活科の学習を生かし、地域に密着した学習という大きな柱の下、3年生では「郷土学習」、4年生では「国際理解」、5年生では「福祉」、6年生では「環境」という大まかなベースを設定して行っている(次ページ図1)。しかし、今年から子どもの興味・関心を重視していくことと、さらに学習を深めていくという観点から、徐々にその枠にとらわれずに進められるようになってきた。

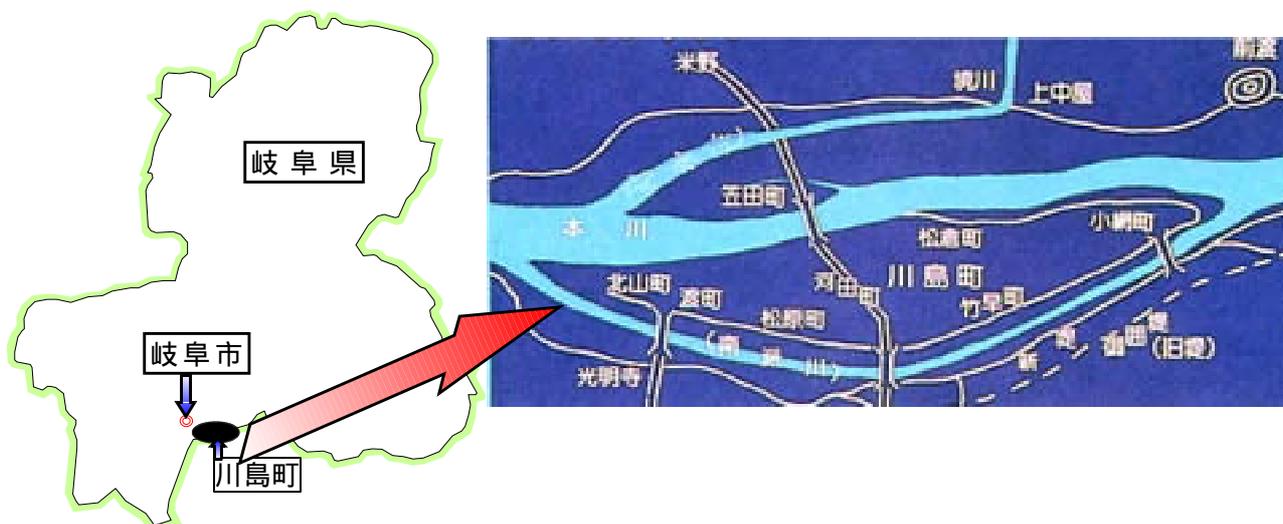
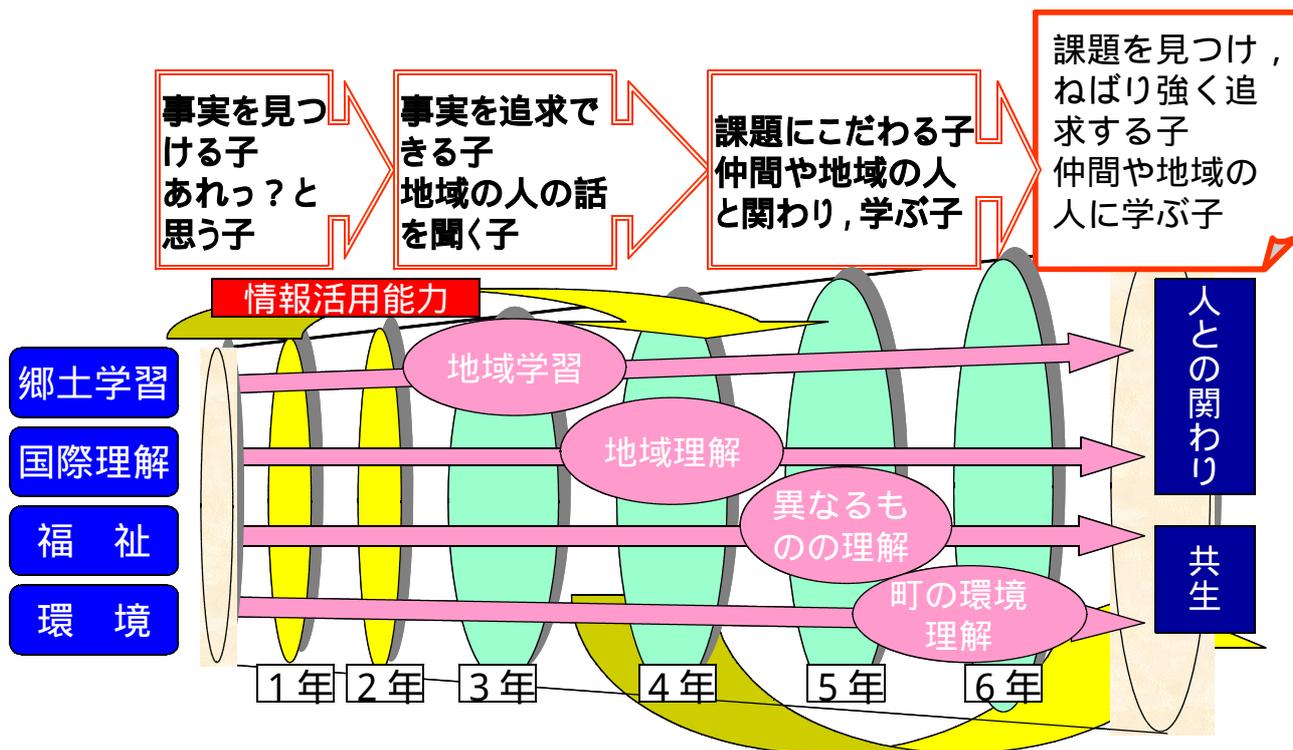


図1 本校の総合学習の考え方



### 3. 本年度の実践と昨年度の実践の比較

#### 実践1 (平成14年度)

##### 第4学年「木曽川に囲まれた町、川島」

#### (1) つけたい力

自分たちの町を囲んでいる木曽川や川に囲まれている町ならではの特徴に関心を持ち、町探検をする中で自ら見つけた疑問を解決するために、木曽川の調査、河川環境楽園の実験河川での研究、自然研究共生センターを見学、町民会館での調べ学習及び取材、地域での取材などを通して、町を囲む木曽川や木曽川に囲まれた川島町への理解を深めたり、愛着を持ったりすることで、自分ならではの町自慢をできるようにする。

また、木曽川や川島町について学んだことを、まとめ方や発表形式を工夫して外国人講師に伝えることができる。

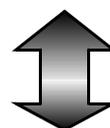


#### 実践2 (平成13年度)

##### 第6学年「川島エコクラブ隊」

#### (1) つけたい力

自分と身近な自然との関わりに関心を持ち、町探検をする中で、自分が住んでいる町の環境の実態を知り、その環境に対して何か働きかけをしたり、木曽川の調査や環境楽園での学習を通して、自然と人間とのかかわりを学び、人間にも生物にもよりよい生活環境をつくっていかうとする態度や気持ちを育て、この学習が終わってもその気持ちを継続してもてるようにする。



#### 【つけたい力の比較】

先の表1で示したように、中心となるテーマが4年生は「国際交流をふまえた地域理解」、6年生は「環境理解」とちがうので、その内容によるつけたい力の差というものもあるが、基本的には地域を中心とした問題解決的な学習であることは、同じと考え、学年が上がるにつれて、より粘り強く課題を追究したり、地域や仲間に学ぶ子に育てたいと考えている。

4年生では、やはり地域理解ということが中心となり、地域に愛着をもつということまでを願った。6年生では、自らが自分たちの地域に働きかけるということまでを願いとして学習した。

#### (2) 指導目標 (4年生)

木曽川や川島町の歴史を知り、先人の努力や工夫を知ることができる。

木曽川探検をしたり、魚捕りをしたり、自然研究共生センターで学んだりすることで、木曽川の生物や環境についての理解を深めることができる。

実験河川を見学したり、魚を捕ったりすることで、環境楽園がどんな研究をしているところかを知ったり、木曽川にはどんな魚がいるかを調べたりすることができる。

川島町の地場産業や伝統文化についての理解を深めることができる。

学んだことを外国人に伝えることができる。

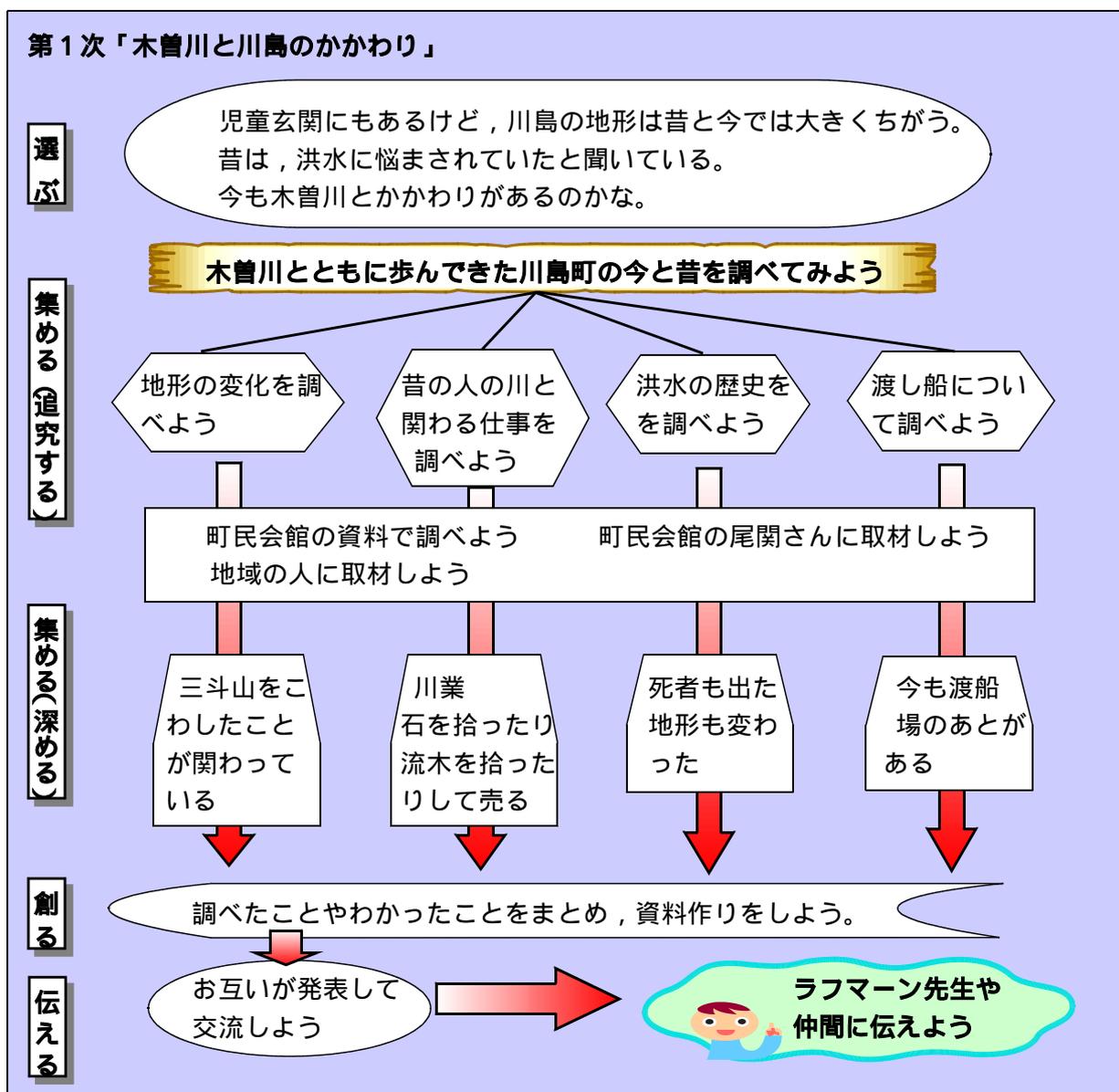
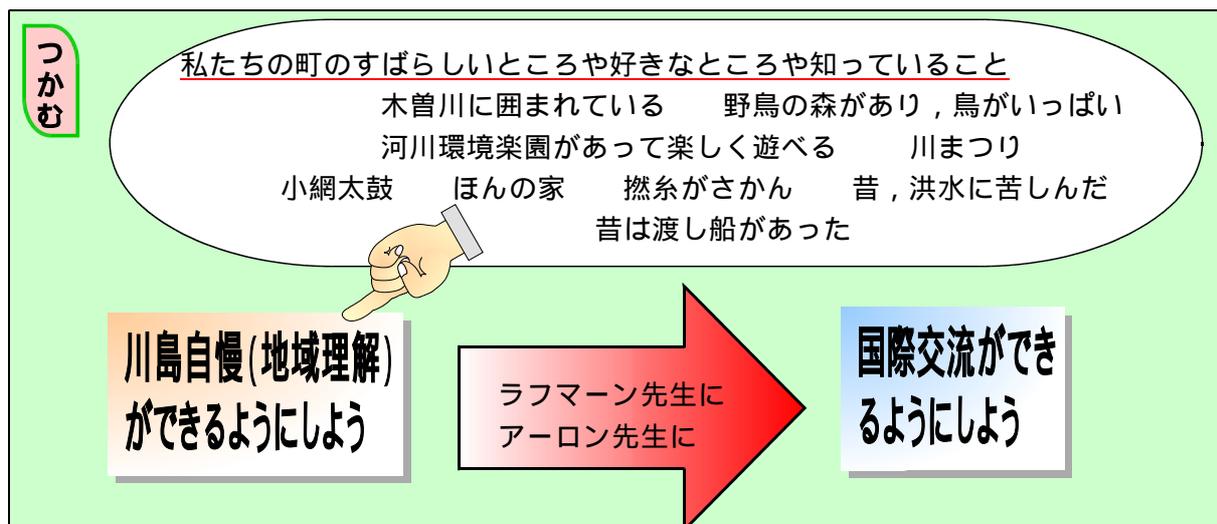
#### (2) 指導目標 (6年生)

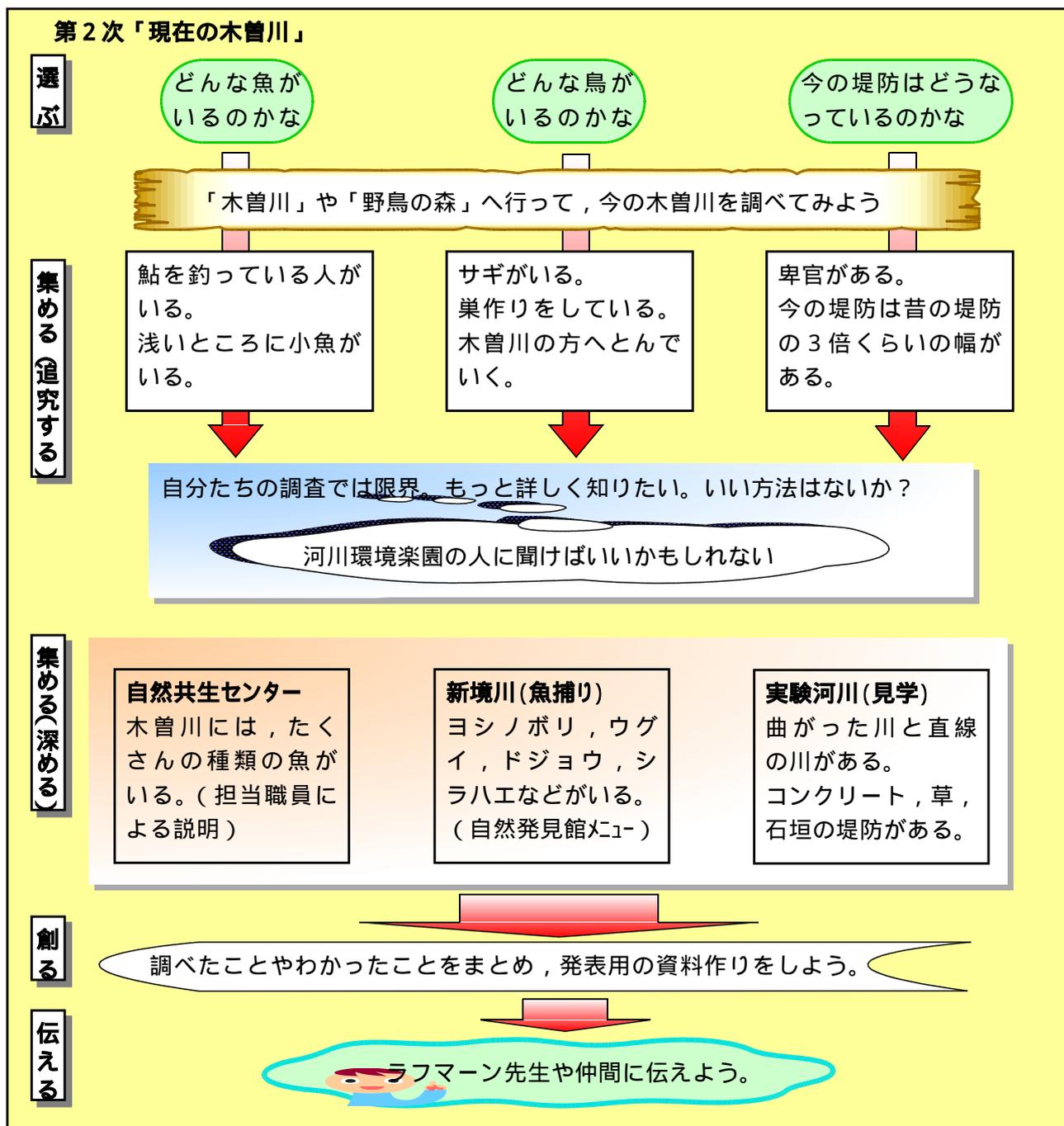
環境を視点とした川島町及び木曽川探検から、環境の実態をすることができる。

環境を守るための活動ができる。

河川環境楽園内の実験河川を見学したり、河川の中の魚を捕ったりすることで、生物にとってよりよい環境を見つけることができる。人間にも生物にもよい環境を作っていくためにどうしたらいいか提案することができる。

(3) 単元構想図 4年生「木曾川に囲まれた町、川島」





**第3次 「河川環境楽園」**

川島に河川環境楽園が作られたわけ  
自分が作る河川環境楽園

河川環境楽園のいろいろな施設の目的

**第4次 「川島の伝統・文化、産業」**

川島の伝統・文化について(食べ物“あゆにゅーめん、松かさぼち”,川まつり,小網太鼓など)  
地場産業について(撚糸,アユ漁など)

## (4)実践の概要(4年生)

### 「つかむ段階」

本校では、これまでに生活科や総合的な学習の時間を進めるにあたって、地域を中心として人と関わることを重視しながら、学習を進めてきた。

4年生では、生活科及び総合的な学習の時間で学んだことをさらに深めたり広げたりして、さらに地域理解をすることで、地域に愛着をもったり自慢できたりし、その学んだことを外国人の先生に伝えることで、国際理解もはかってこう考えた。

まずは、「私たちの町のすばらしいところや好きなところや知っていること」を児童に聞いたみた。

木曾川に囲まれている  
野鳥の森があり、鳥がいっぱい  
河川環境楽園があって楽しく遊べる  
川まつり 小網太鼓 ほんの家  
撚糸がさかん 昔、洪水に苦しんだ  
昔は渡し船があった

など、子どもたちからはたくさんの意見が出た。



そして、4年生での総合的な学習の時間の大きなめあてを子どもに伝えるためにこんな発問をした。「この学習ではさらに地域学習を深めていき、川島自慢ができたり、外国人の先生に伝えたりできるといいんだけど、今出てきた内容で、もっと学習を進めていきたい内容は何かな」ということを聞いてみた。そしたら、おおむね4つの内容に分けることができた。

川島の自然(木曾川や野鳥についてなど)  
地域の伝統・文化及び産業(祭、撚糸など)  
川島の歴史(洪水、渡し船など)  
観光及び娯楽施設(河川環境楽園など)

そこで、まずは、木曾川とのかかわりが大きい川島の歴史について調べてみようということで、この学習のスタートとなった。

### 第1次「選ぶ段階」

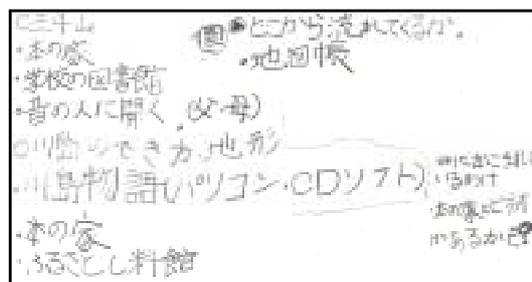
川島と木曾川にかかわる内容で、学習してみたいことを聞いてみた。

木曾川の洪水について  
川島の地形の変化について  
渡し船について  
川とかかわるよな仕事

などができた。

そこでそれらを調べる方法について話し合った。図書館の本という意見が多かったが、中には「うちのおじいちゃんに聞いてくる」とか、町民会館(歴史資料館)で調べるというような方法がでてきた。

それぞれが、自分の一番学習したいことを選択して、自分のテーマを決め、グループ分けをした。(見通しをたてているノート)



### 第1次「集める(追究する)段階」

主に図書館の本を使って調べた。

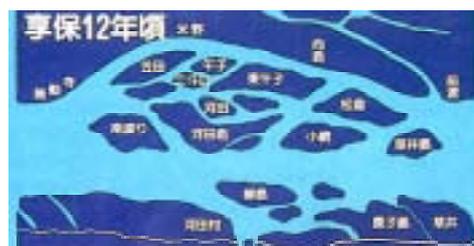
#### 洪水歴史班

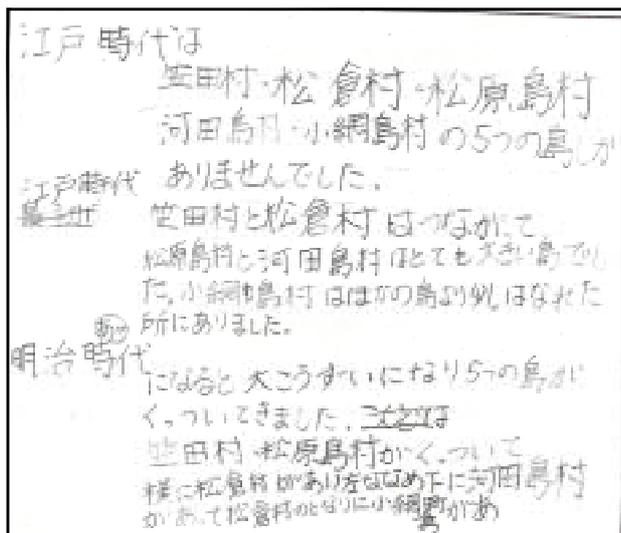
洪水の歴史については、川島の歴史年表のようなものの中から、洪水の内容だけ取り出し、洪水年表を作ったり、死者が出るほどの洪水もあったことを知ったりすることができた。三斗山をなくしたことと洪水の数とのかかわりがあることもわかった。

#### 川島の地形班

学校の児童玄関に地形の移り変わりの図があるので、それをデジタルカメラに撮ったり、スケッチしたりした。また、詳しい内容を知るために、役場のホームページにもアクセスして調べた。

(川島町ホームページより)





(地形を調べた子の学習プリント)

この班も、三斗山をなくしたことが地形を今のような地形に近づいたことを学んだ。

### 渡し船班

主に、「川島図鑑」で調べ、渡し船があった位置やいつまであったかなどがわかった。

### 川とかかわる仕事班

本で調べ、川業というものがあったことを知った。石を拾って売ったり、流木を拾って売ったりしていた。また、むかしも鮎漁はさかんであったこともわかった。

子どもたちの中には、本で調べるだけでは、物足りないし限界があるので、人に聞いたり、町民会館に行ったりして、もっと詳しく調べたいという意見が出てきた。

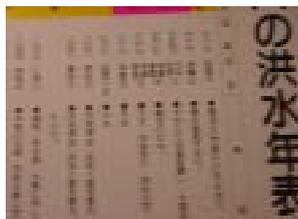
そこで、町民会館へ行きさらに詳しい資料をさがすことや学芸員の尾関さんにお話を聞いてくる運びになった。

### 第1次「集める(ふかめる)段階」

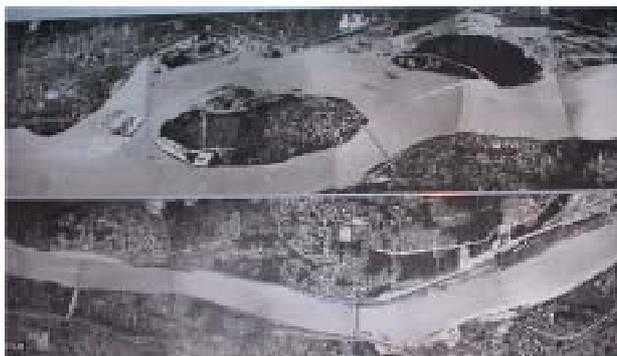
町民会館では、実物が展示したあったり、レプリカもあるのでデジタルカメラを各班に持たせた。

### 洪水歴史班

この班は、さらに詳しい歴史年表が展示してあることを見つけ、デジタルカメラに撮ったりメモしたりしていた。また、洪水



を防ぐ堤防を作るためと、木曽川の流れを変えるために三斗山をこわしたことも知った。

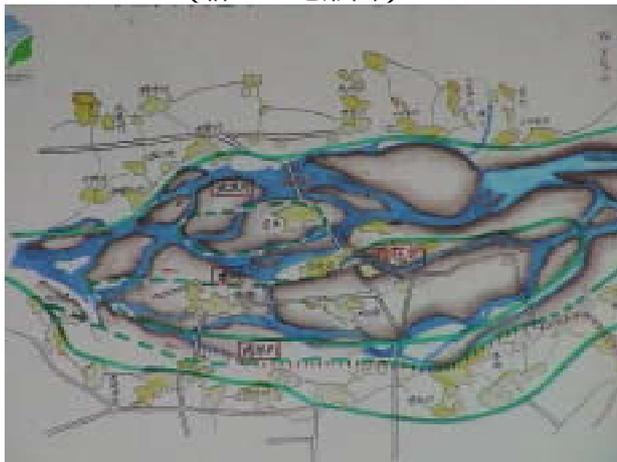


(洪水時と平水時の航空写真)

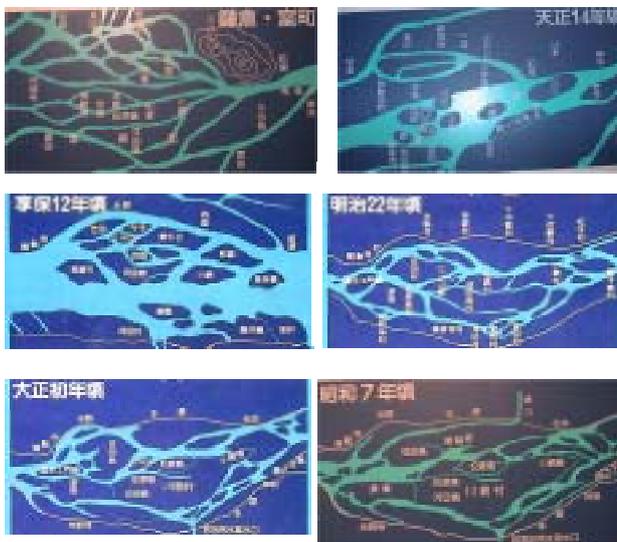
### 川島の地形班

学校の児童玄関やインターネット資料には、4つの年代の地形図しかなかったが、ここではさらに詳しい地形図を得ることができたし、年代ごとの地形図も8つあり、より詳しくわかった。

(詳しい地形図)



(年代ごとの地形図)





また、大正時代に三斗山をこわしたことが現在の地形に近いものになったことと、そのとき30近い世帯が移転させられたこと、それによって大きく川の流れが変えられたこと、そのこわしたときの土を蒸気機関車で運んで、堤防を作ったことなどがわかった。



(町民会館横にある三斗山島跡の石碑)



(河川改修時の蒸気機関車)

### 渡し船班

当時の様子などを尾関先生に取材したり、当時の様子が見られるような写真を見つけたりして、より詳しく知ることができた。尾関さん



### 川とかかわる仕事班

実際に使っていた船や川業の様子が再現してあるので、当時の様子がイメージできた。



(石をとっている様子)

(洪水時に流木を集めている様子)

### 第1次「創る、伝える段階」

まとめるにあたって次のような助言をした。発表する相手は、ラフマーン先生と他の課題を調べた仲間であること  
ラフマーン先生は、ある程度の日頃会話して

いるような日本語しかわからないこと。特に、漢字はわからないこと。

発表用の資料には、絵や図を大きく書いて、できるだけ文字は少なくすること。



(模造紙を使った発表)



(パソコン画面を使った発表)

子どもたちが、発表用の資料を作るとやたら提示資料の中に言葉の説明を書きたがる傾向にあった。なぜそうするかというと、発表するときに、そこに書いてある文を読めばいいという考えからきている。しかし、それが本当にみんなにわかってもらえたことになるのかということ問い返し、今回は外国人に発表するという条件もプラスされるので、一般的に文字がいっぱい書いてあってもそれを一字一句読む人は少ない。ただ、掲示するだけなら別だけど、発表して説明する人がいるんだから、絵や写真を使いながら言葉で説明していくことが大事である。みんなに見せるための資料には、文字はなくてもいいとも話した。

発表形式は、模造紙とパソコンを使ったものが多かったが、紙を見て話すのではなく、図や

写真を指し示しながら、話すことができた。

発表後数日してから、発表会の様子をふり返った。子どもたちからは、やはり「ラフマーン先生にはわかりにくかったと思う。」という感想が多く出てきた。「もっとわかりやすくするために、劇や紙芝居形式にしたりペープサートを使ったりした方が分かりやすい。」という意見も出て、2回目の発表に生かすことにした。

### 第2次「選ぶ段階」

ここでは、「川島と木曾川とのかかわりについての歴史」がある程度分かった中で、じゃ「今の川島と木曾川のかかわり」はどうなのかという点で、学習を深めていくことになった。

子どもたちにそういう視点で発問してみると、木曾川には釣りをしている人がたくさんいるから、アユはいると思うけど、どんな魚がいるのか知りたい。

野鳥の観察でも有名で、「コウライアイサ」という鳥の名前を聞いたことがあるので、どんな鳥がいるか調べてみたい。

今の堤防を詳しく調べてみたい。

という意見が出て、実際に見学に行ってみることにした。

### 第2次「集める(追究する)段階」

実際に木曾川に行って魚を捕まえる班(魚班)、野鳥の森へ行って野鳥を観察する班(鳥班)、堤防へ行って昔の堤防と今の堤防を比べる班(堤防班)に分かれて見学に行った。



(木曾川で魚捕りをしている様子)

(野鳥の森で巣作りをしているサギ)



(堤防の高さを身長と比べながらはかっているところ)

この見学で魚捕り班は、浅瀬にいる小魚を捕まえることができたが、それ以上のことはできなくて、どんな魚がいるのかは、詳しくわからなかった。

鳥班もいろいろな野鳥がいることはわかったが、詳しくはわからなかった。

堤防班は、昔の堤防と今の堤防が比較できたり、昔堤防が決壊したところに卑官という神棚のようなものがあり、もう決壊しないようにという願いが今もこめられていることがわかった。

全体的には、自分たちの調査には限界があることを感じていたので、「河川環境楽園にいてもっと詳しいことを教えてもらったり、自分で調べたりしよう。」と教師側から提案し、調べ学習に行くことに決まった。

### 第2次「集める(深める)段階」

河川環境楽園に行き、「木曾川にはどんな魚がいるか」と「堤防や川のつくり」について学習してくるようになった。鳥については、地域の方が寄贈してくださった川島で見られる野鳥のパネルがあるので、それを活用して学習することにした。

計画した日があいにくの雨で、投網も計画していたが子どもたちの健康状態を優先して、投網の実演はなしとなった。

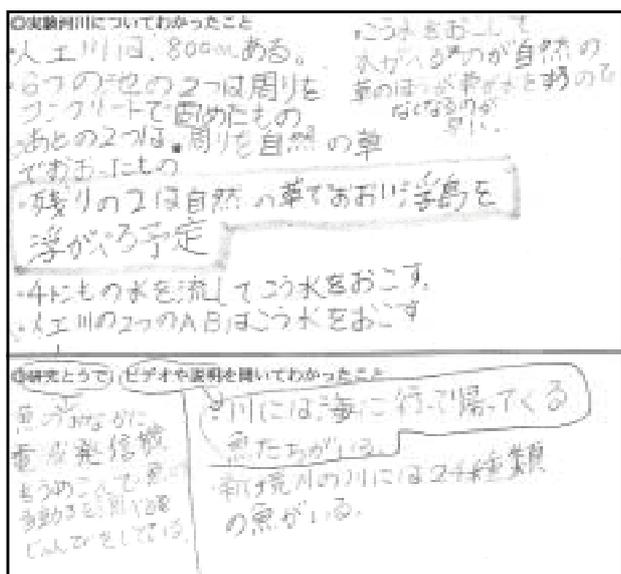


(雨の中実験河川の見学をしている様子) 学年を2グループに分け、先に自然共生センターで、スライドやビデオを見て、木曾川の魚に

ついて学習する班と実験河川の見学をする班に分かれて学習した



(自然共生センター内でビデオをみて学習している様子)



2回目の学習は、魚を捕ってみる活動に始まり、自然発見館のプログラムの1つを受講するという形で、指導員の方についても、魚の捕まえ方、魚の見分け方、魚の名前などいろいろ (魚を捕まえているところ) と教えてもらうことができ、子どもたちも大満足であった。



(指導員の方に捕まえた魚の説明を受けている様子)



木曾川にどんな魚がいるかということがよくわかったし、川島のあたりではどんな魚がいるのかを自分で実際に捕まえたり観察ケースの中で泳いでいる魚をみたりして、直接体験ができたことが非常によかった。

また、実験河川では、堤防のつくりがコンクリートだったり、土のままだったり、石垣だったりすることや曲がった川と直線の川を作って比較することなどで、魚にとって棲みやすい川作りの研究がされていることがわかった。

### 第2次「創る、伝える段階」

ここでは、前回の反省を生かして、いろいろな形式でまとめが行われた。



(模造紙を使って川による魚の生息数をグラフ化して発表している様子)



(パソコンの画面を使って発表している様子) その他、劇、紙芝居、ペープサート、模型などを使ってまとめ、発表している班もあった。

### (4)実践を振り返って(4年生)

とにかく川島町に住んでいる以上、川島町のことを自信をもって人に紹介できるようにしようということでスタートしたこの総合的な学習の時間。

最初は「そんなこと簡単」と思っていた子もいろいろ調べてみると奥が深く、自分の知らないことがいっぱいあることに気づく。特に川島町の先人の苦勞など知る由もない。調べていく

うちに、「こんなところに山があったんだ」とか「その山の土を堤防にしたんだ」とか「昔は洪水のときでも流木を拾って生活していたんだ」など、子どもたちの興味はどんどんふくらんでいった。

そして、本で調べるだけでは物足りなくなり、昔を知っている人の生の声を聞きたいという地域の人の関わりが生まれてきた。

さらに昔のことがある程度わかってくると「今はどうなの」という疑問が当然のようにわいてくる。質問を重ねるうちに、木曽川に囲まれている町なのに現在は川と関わって川島町で生活している人はほとんどいないことに気づいた。そういう先人の川と関わった生活があったからこそ、今の私たちの幸せな暮らしがあることにも気づいた。

その後、子どもたちに今も川を守っている人はいるし、川島町の人じゃないかもしれないけど川と関わって生きている人はたくさんいるということを伝え、「今の木曽川」について調べた。

ここでは昔の堤防と今の堤防の太さが大きくちがうことや、乗り越え堤といって大水のとき水が分散するように低く作ってある堤防があることなどを学んだ。また、どんな魚がいるか知ったことや、実験河川や自然共生センターの存在や行っていることを知ったことなどは、地域

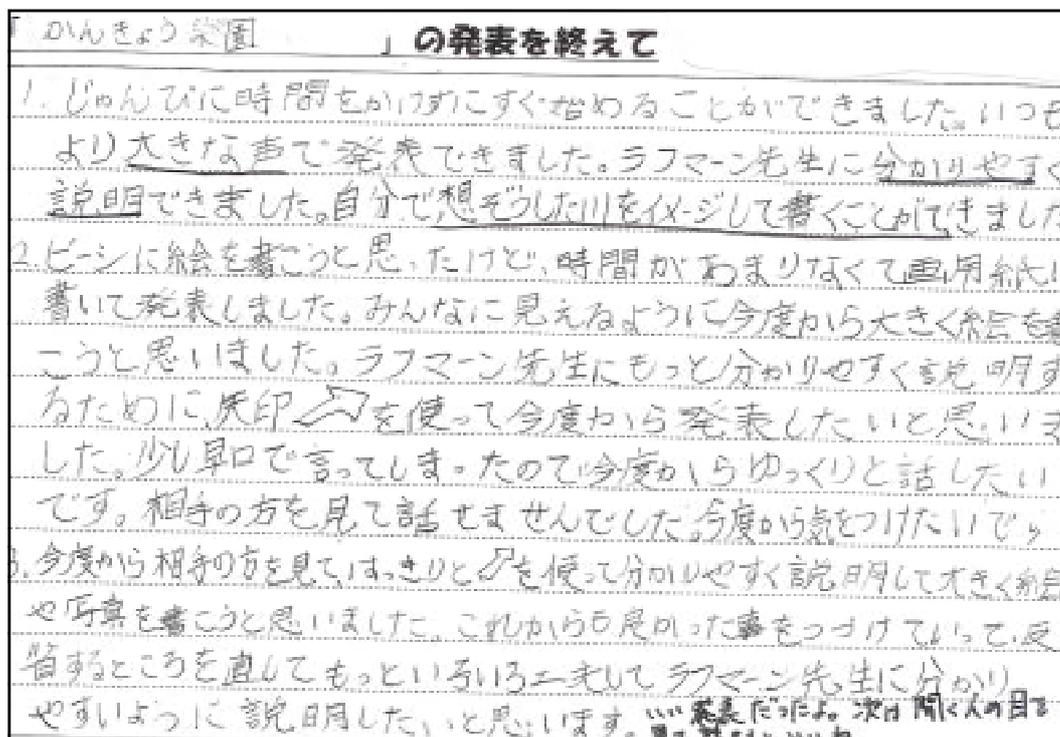
のことを誰かに紹介するということに関しては、すごく材料が増えたのではないかなと思う。

それに、最近、川に入って魚捕りをするという経験の少ない子たちに、魚捕りを経験させられたことや川のどの辺りに魚がいるかなどを学べたこともよかった。

さらによかったことは、子どもたちの自主的な活動の範囲が広がったということである。今まで、町民会館については休日や放課後など、自主的に利用している子もいたが、この学習を機会に、自分たちでビデオカメラなどをもって、自然共生センターまで行って、もう一度取材をしたり、確かめをしたりする自主的な活動も生まれた。自ら問題を解決していこうという模範的な姿であったし、そういう子の発表を見ていた子にも、刺激になったのではないかなと思う。

また、外国人に伝えるということでも、わかってほしいという願いをもって、まとめ方や発表方法を工夫していった点もよかった。

まだまだ、問題の持ち方、追究の仕方、まとめ方、発表の仕方などにたくさん問題はありますが、少なくとも今回の学習で、自分が自信をもって紹介できる川島町の場所が増えた子が多かったことが、地域理解を深めるというねらいに迫れたのではないかなと感じた。



(発表後に、自己評価をした振り返り)

**(5) 単元指導計画(構想図) 6年生「川島エコクラブ隊」**

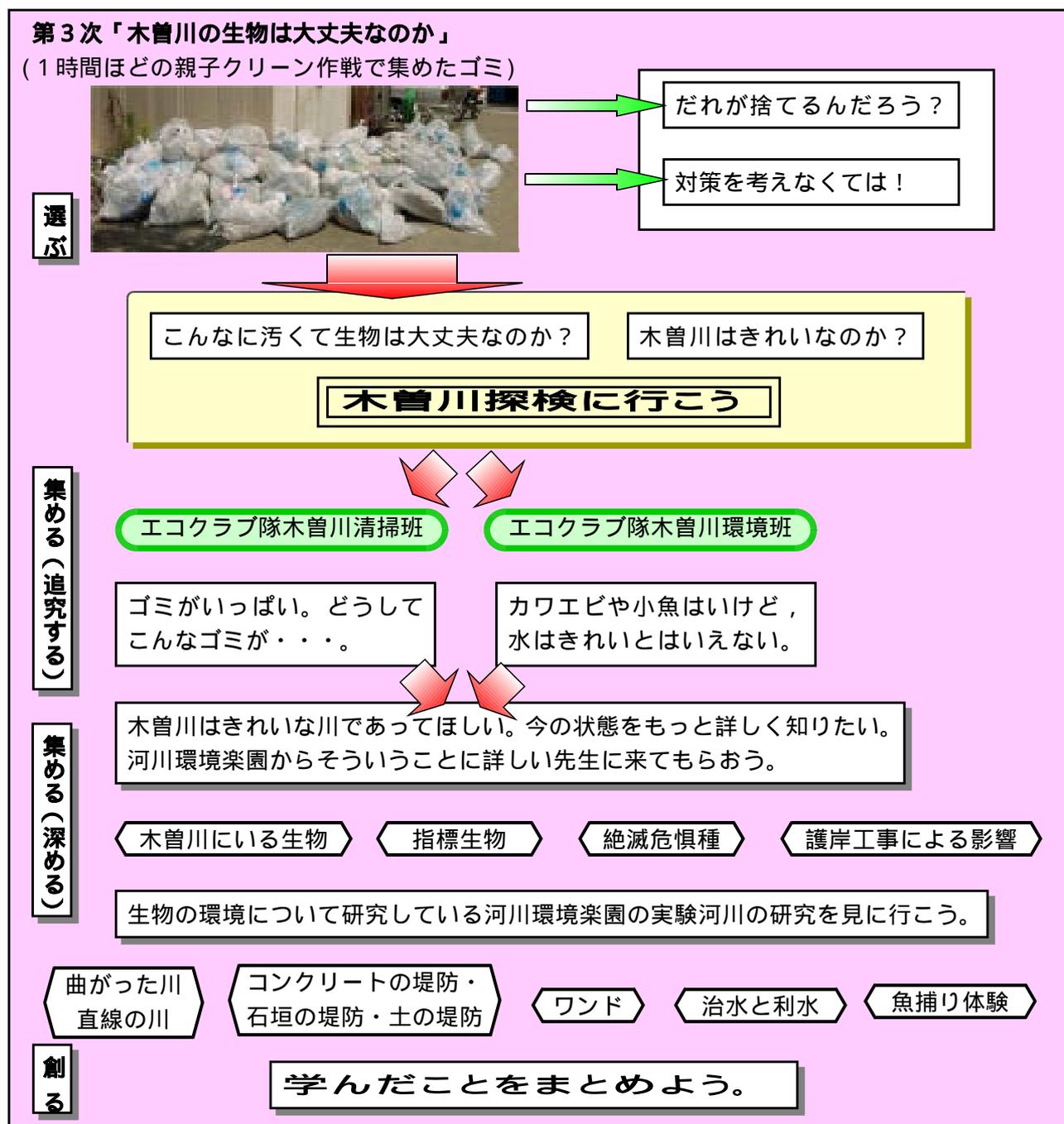
**第1次「川島町の環境の実態を知ろう」**

環境(よい所・悪い所)という視点をもった町内探検

- ・ゴミがたくさんあった
- ・木曽川には、冷蔵庫やタイヤまで落ちていた
- ・自然がたくさんある
- ・木曽川の水はきれいなのか

**第2次「自分たちの手で環境を守ろう」**

クリーン作戦(住んでいる地区のゴミ拾い)      空き缶リサイクル  
 学んだことを全校に発表しよう



**第4次「小中連携リサイクル」** 空き缶リサイクルで世界の困っている人たちの役にたとう。

**第5次「伝えよう」** 1年間の総合的な学習の時間に学習したことを、5年生と交流する。

## (6)実践の概要 6年生「川島エコクラブ隊」 選ぶ段階

第1次で実践したクリーン作戦や第2次で実践した自分の住んでいる地域のクリーン作戦から、子どもたちは「川島町はゴミが多くて汚い」という印象をもった。それと同時に、こんなに汚くても生物にも悪い影響があるのではないかと。それに、木曽川には産業廃棄物のようなとんでもないゴミが落ちていて、私たちの町を囲み、親しみのある木曽川はきれいであってほしいという思いがこみ上げてきた。

### 集める(追究する)段階

「もっと木曽川の様子を詳しく調べてみたい」という思いから、清掃班(ゴミ拾い中心)と環境班(生物調査中心)に分かれて活動した。



(清掃班が集めたごみ)



(環境班が捕まえた生物)

木曽川をきれいにしたいという思いからか、清掃班を選択する子が多かった。ゴミは確かにいっぱいあって汚い感じはするが、ヤゴやオイカワ、カワヘビなどを捕まえることができたし、水も本流の方はきれいという印象をもった。

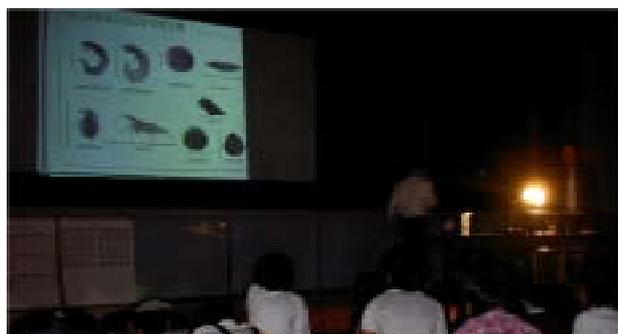


(学年全体で交流会をしている様子)

この交流会では、気づいたことなど発表したが、個によって観ている観点がちがうし、きれいとか汚いというのは、主観のちがいもあって「私たちの町を囲む木曽川は大丈夫なのか」ということでは、結論を出すことはできなかった。

### 集める(深める)段階

そこで、河川環境楽園の自然発見館から講師の先生にきていただき、木曽川的环境について2回にわたって語ってもらうことにした。



まず、最初に木曽川でみられる魚や生物についてパソコンの画面に合わせて説明してもらった。その中には、絶滅危惧種に指定されている魚もあることを教えてもらい、その数が結構多いことに、子どもたちは危機感を感じ始めた。

次に、指標生物の話聞き、川島周辺の木曽川では、水がきれいなことを表す指標生物がいることを聞いて、少し安心した。

その次に、水がきれいとか汚いという以外に、魚にとってすみ家がないといけないという話を聞いた。人間は、自分たちの身の安全を守るために、河川の護岸工事をする。その工事することで、岸辺や底をコンクリートで平らにしまうと、魚のすみ家がなくなりすめなくなってしまう。子どもたちは、今まで水がきれいか

汚いだけで、木曾川の環境を考えていたが、人間を守ろうとすることが、魚を絶滅に追い込んでいるということを知った。

最後に、河川環境楽園の実験河川で、人間も魚もすみよくするにはどうしたらいいかの研究がされているという紹介がされ、実験河川を見学に行く運びとなった。

実験河川では、直線の川・くねくね曲がった川、コンクリートの護岸・石垣の護岸・土のままの護岸など、いろいろと比較研究できるようになっていた。またワンドという魚のよどみになった産卵場所に適する所とか、河床に丸太のような杭をうってさかなのすみ家となるようなものも作ってあった。



直線コンクリート護岸



直線護岸なし



説明を受けている様子



ワンド

また、自然共生センターでは、実験河川ないの研究内容や研究結果、治水と利水などの説明を聞いた。子どもたちは、曲線の川と直線の川の魚の数のちがいに驚いていたし、魚の習性なども関わっていることを学習した。



(自然共生センター内で学習している様子)

その後、魚のすみ家などを教えてもらったことを実体験するために、川へ行って魚捕りをし

た。



この写真の場所で魚捕りを行ったが、浅い川で「本当にこんなところに魚がいるの？」と疑いたくなるような川であった(実は、いろいろとでこぼこがみえるように、人工的に魚のすみ家を作ってある川)。

最初のうちは、子どもたちも魚の姿が見えないので、なかなか捕まえることができなかった。しかし、すみ家ということをおぼろげに思い出すと、指導員の方にアドバイスをもらうことで、子どもたちが網を入れる場所がかわってきた。



写真のように川の真ん中に行く子はいなくなり、魚の隠れていそうな場所に網をいれるようになってきた。そしたら、徐々に魚が捕れ始め、すみ家の大切さを実感していた。



(カワエビ)



(ヨシノボリ)

### 創る段階

ここでは、学年全員がほとんど同じ活動をし

たことと、分かれて活動した所も途中で様子を交流しているので、それぞれが新聞形式でまとめることにし、廊下掲示を行った。

### (7)実践を振り返って(6年生)

この学習を通して、どんなことでもいいから自分たちが環境にはたらきかけができるようにと考えた。

最初に環境を視点を町探検をしたときに、川島町のゴミの多さにびっくりして、子どもたちは、まずそのゴミを少しでもなくしたいと思った。だから、自分たちでゴミ拾いをしたいと言いつ出した。そして、その意識が1年間継続し、計5回のクリーン作戦を実施することができた。

また、夏休みの宝物作りでも、自分の地区のゴミマップを作り、定期的にゴミ拾いをしたり、海と川の清掃のボランティアに参加したりする子も出てきた。

さらに、その活動が空き缶リサイクルにつながり、ゴミ拾いから人助けができたことに、子どもたちは満足感を得ていた。

生物に対しては、自分からはたらきかけは、なかなか難しいが、水の汚れだけに目がいっていたことから、魚のすみ家まで目を広げることができたし、人間と生物が共生していくためにいろんなところでいろんな人が努力していることを学ぶことができた。その学んだことは、今すぐ自分の手で何とかできることではないが、将来この学習を生かして、環境に対してはたらきかけるような子が何人か出てくると思う。

### (8)2つ実践を振り返って

同じ河川環境楽園を利用した学習であるが、4年生では地域理解から迫り、6年生では環境から迫った。

4年生の地域理解という点では、最初から河川環境楽園の一部を深く学習するのではなく、河川環境楽園をもっと広く学習して、どういう学習に役立てることができるかを知ってから、子どもたちが選んでその施設を活用していくような学習展開にしていかななくてはいけないと感じた。どちらかという点、私自身に「川と関わる学習」を進めていかななくてはいけないという意識が強かったため、教師側がルールを敷いてその上に乗っからせた形で、子どもの本

当に知りたいことややりたいことへと最終的に結びついていなかったんじゃないかと感じた。

やはり、3～4年生でたくさん地域のことを知っておくこと。そして、5～6年生の学習でそれを生かしていくことが、学習を深めていくことになると感じた。

6年生では、「木曾川の生物は大丈夫なのか」を確かめたいという気持ちを子どもたちはすごく持っていたので、子どもたちの方から、もっと詳しく調べる方法はないかと意欲的だった。自然発見館の先生に、「きれいを示す指標生物が川島にも結構いる」と聞いたときの安堵感や「絶滅危惧種」の話のときの危機感などは、その表れであると感じた。

実験河川や自然共生センターで学習したことは、人間と生物が共生をしていくために、こんな努力や研究がなされているんだということ詳しく知ったことで、ゴミを捨てることはもちろんだけど、自分たちの力で環境にはたらきかけていく術がいろいろあるんだなという環境に対する見方や考え方が育ったのではないかと感じた。

### (9)評価について

本校は、情報教育についての研究を行っているため、総合的な学習の時間もその情報教育の目標と照らし合わせた内容で行い、個に応じた力を伸ばしていくために活用し、指導と評価が一体化するようにした。

具体的には情報活用の実践力と総合的な学習の時間の目標と学習指導要領の4観点とを照らし合わせ、選ぶ(気づく段階)、集める(追究する段階)、創る(まとめる段階)、伝える(発表)と4つの内容に分けて考えて指導にあたった。(学校全体のものではない)

#### **選ぶ**

既存の知識を生かして、さらに学習を深めていくために、問題を見つけたり、学習課題を選んだりしていくことができる。学習指導要領の4つの観点の中の「関心・意欲・態度」を、発言内容及び学習プリントから評価する。

#### (評価基準)

A：自分で学習したいことや調べたいことを見つけ、疑問に思ったことや深めて

みたいことなどから課題作りができ、  
追究の見通しを立てることができる。

B：自分で学習したいことを見つけたり、  
意見交流などから、自分の課題や追究  
の見通しをもつことができる。

手立て 1つの学習のテーマや方向に対し  
て、学年で意見交流をすることによ  
り、多様な考え方を聞く中で、  
「自分が一番興味のあることや得意  
そうなことは何か。」などを聞きな  
がら、課題作りや見通し作りをす  
る。

### 集める

追究課題に対して、本・データベース化され  
た情報・インターネット・TV会議・資料館の  
活用・実地見学・取材などの追究手段から、よ  
りたくさんの情報を集めることができる。学習  
指導要領の4つの観点の中の「技能」を行動観  
察から評価する。

(評価基準)

A：自分の課題追究に対して、もっと詳し  
い情報はないかといろいろな追究手  
を活用して、よりたくさんの情報を集  
めることができる。

B：自分の追究課題に対して、最低限の情  
報を集めることができる。

手立て どういう追究手段をとるといいか  
やどんな本を参考にするといいか  
を助言する。

### 創る

自分の課題を追究していくために必要な情報  
取捨選択し、まとめることができる。学習指導  
要領の4観点の中の「思考・判断」「表現」を行  
動観察及びまとめた資料から評価する。

(評価基準)

A：自分の課題追究に対して集めた情報を  
取捨選択して、絵や図などを使って必  
要な情報だけを簡潔明瞭にまとめるこ  
とができる。

B：自分の課題追究に対して集めた情報を  
取捨選択して、絵や図などを使ってま

とめることができる。

手立て 課題解決のために集めた情報を助  
言を受けながら、教師といっしょ  
に取捨選択をしまとめる。

### 伝える

ともに学ぶ相手や外国人などに、まとめた資  
料をデータベース化したり拡大したりして、考  
えを伝えたり、聞いたりして理解を深めるこ  
とができる。学習指導要領の4観点の中の「知識  
・理解」「表現」を発表の様子から評価する。

(評価基準)

A：発表するときは、原稿を見て話すの  
はなく、絵や図の中にある言葉をつな  
いでいながら、相手にわかりやすく  
伝えることができる。

B：図や絵を指し示しながら、暗記した発  
表原稿をそのまま言うことができる。

手立て 発表原稿を教師の助言を参考にし  
ながら書き、そのまま読む。

## 4. 今後の課題

川の学習をするためには、どれだけ事前指導  
しても危険がつきものである。今回、事故は  
起きなかったが、児童数に対して学年の教師  
とフリーの教師の援助では、足りない。今後、  
保護者や地域の方々に協力をいただくような  
形で進めていかななくてはならない。

学習のねらいに迫るために、どうしても学年  
統一の動きを考えてしまうが、どの活動や学  
習を選択しても、つきたい力が付くようなカ  
リキュラム作りをしていかななくてはならない。  
河川環境楽園は、総合的な学習の時間の題材  
としては非常に素晴らしい要素をもっている  
が、学校から歩くと、子どもの足で1時間弱  
かかるので、効率的なカリキュラムを考えな  
なくてはならない。

評価について、授業中の行動観察で全員をと  
らえることは難しい。学習プリントなどの評  
価を次時の授業の指導に生かせるように、意  
図的な支援計画を立てていかななくてはな  
い。